



大村 恵美さん (24歳)
駿河竹千筋細工
従事者

●プロフィール

【小学校】
図工が得意で、ものづくりの楽しさを感じはじめる。
5年生、社会の授業で全国の伝統工芸品を学習。伝統工芸が気になる存在に。

【高校】
2年生のとき、進路として伝統工芸職人の道も視野に入れる。

さらに、静岡県の伝統工芸展で、駿河竹千筋細工を見て、その美しさに感動。竹細工の職人になることを決意。

伝統工芸士の篠宮康博さんのもとで修業することが決定（静岡市の地場産業後継者育成支援制度「クラフトマンサポート事業」を利用）。
高校在学中から工房へ見習いに。

【修業】
高校卒業4日後から、本格的に修業の道へ。無我夢中で、技術を習得する。

伝統工芸を知らせる立場に。地元のパートで、お客さんの前で、制作を実演するなど、工房の外でも活動中。

あこがれから入った伝統工芸の世界 地道に、着実に成長を続ける



で、すべて一人で行います。
今では一通りの技術を身に付けましたが、経験を積み重ねるほど、難しさと奥の深さを感じる毎日です。
「篠宮先生から首尾一貫言われるのが、継続の大切さです。なただけ竹を割ったり、削った竹に熱を加えて曲線をつくったりと、行う作業は、弟子入りした当初も現在も変わりません。しかし、経験を積むにつれて、だんだんと竹を曲げる角度や力の入れ具合などが体で分かってくるようになりました。いつも、今度はもっとうまく曲げようと自分で言い聞かせながら作業していますが、まだまだ納得できる仕上がりになりません。さらに経験を積みみたいです」

自分の発想を作品に取り入れたい
今年、修業が七年目を迎えた大村さん。現在でも初心を忘れず習得した技術を日々磨いています。また、それだけでなく、駿河竹千筋細工の普及やPRにも取り組んでいます。地元の伝統工芸展で、大勢のお客さんを前に、制作の実演を行うなど、工房の外でも精力的に活動しています。
そんな大村さんに今後の目標についてお聞きしました。
「篠宮先生は、伝え受け継がれた技法を守りながら、斬新なデザインの作品もつくります。まだ具体的なイメージはないですが、私もいつかは自分の新しい発想で作品を作りたいです」
伝統工芸の世界は、全国的に担い手不

大村恵美さんの
将来へのまなざし
「伝統をしっかりと守りながらも、オリジナリティーのある作風を取り入れたい」

伝統工芸展で感動 竹細工の職人になることを決意
江戸中期から、静岡市に約百六十年伝わる駿河竹千筋細工。一般的な竹細工とは異なり、竹を細く削った竹ひご（丸ひごともいう）をしなやかに曲げ、竹の輪に組み込んで作るのが特徴です。虫籠、花器、あんどん、風鈴など、さまざまな種類の作品が作られます。
この駿河竹千筋細工に魅せられ、日々

経験を積み重ねるほど 難しさを実感
駿河竹千筋細工は、竹割りから、ひご作り、編み上げなど最終的な組み立てまで、後継者難が課題になっています。駿河竹千筋細工においても、事情は同じ。
「いつかは私たちの若い世代も、地域に根付いたこの伝統工芸をしっかりと後の時代に伝えていかなければなりません。そのためにも私自身、高い技術、志を持った一人前の職人にならなければならないと思います。まずは国家資格の伝統工芸士を目指します」

この直後に、静岡県の伝統工芸展を鑑賞する機会がありました。これが大村さんの人生を大きく変えるきっかけとなりました。
「駿河竹千筋細工を初めて知ったのがこのときです。自然に生えている竹から、こんな美しい作品ができるのかと感動しました。地元こんな素晴らしい伝統工芸がある。私も作ってみたい、携わってみたいと強く思ったのです」
その決意を高校の進路相談で訴えると、進路指導の先生は早速組合に連絡を取ってくれました。静岡市が地場産業の後継者育成のための制度を創設する時期にちょうど当たっていた幸運も重なり、その制度を利用して、伝統工芸士の篠宮康博さんの下で修業することが決まりました。
「あこがれだけで入った世界。今考えると、何の知識もない、とりえもない私をよく受け入れてくれたと感謝しています。両親からも『やりたいことなら真剣にやんなさい』と励ましてもらいました」

と強く思ったのです」
その決意を高校の進路相談で訴えると、進路指導の先生は早速組合に連絡を取ってくれました。静岡市が地場産業の後継者育成のための制度を創設する時期にちょうど当たっていた幸運も重なり、その制度を利用して、伝統工芸士の篠宮康博さんの下で修業することが決まりました。

◆果物かごができるまで◆



なたを使って竹を割る。この後、細く削る。



輪作りという作業の一部。ガスで熱した管（胴乱）に削った竹を巻き付けて輪をつくり、曲げていく。秋になっても暑い。



輪の調整。輪がきたら、この後、竹ひごを組み込んでいく。



完成した駿河竹千筋細工の果物かご

「教員のための金融教育セミナー」を開催

このコーナーでは、毎回、金融広報中央委員会（以下、金広委）の最近の取り組みや活動内容を紹介してまいります。今回は、「教員のための金融教育セミナー」の様相をご紹介します。

学校における金融教育の推進のために

子どもたちに望まれる「自立する力」や「社会とかわる力」を育てるために、金融教育へのニーズが高まっています。金広委では、学校の先生方を対象とする金融教育セミナーを八月六日に東京にて開催しました。当日は、全国から約百八十名の方が参加されました。

豊田武久会長による開会挨拶に続き、文部科学省からの来賓として、初等中等教育局教育課程課の牛尾則文視学官より、本セミナーで得られた

ものを活用して金融教育をさらに幅広く実践してほしいとのご挨拶をいただきました。

金融教育プログラムに沿って

金広委では、本誌前号で紹介した『金融教育プログラム—社会の中で生きる力を育む授業とは—』を発行しましたが、本年度のセミナーでは、この『金融教育プログラム』の作成に当たってご協力いただいた学校教育の専門家の方々や、指導画例の執筆をいただいた先生方に、講演や討議、分科会での指導をお願いしました。

講演・パネルディスカッション

講演では、岐阜大学教育学部の大杉昭英教授より「学校における金融教育の進め方」とのテーマでお話しいただきました。大杉先生は、国民が自己責任を負うべき場面が増加していくとの時代認識の下で、児童生徒が将来消費者として自立するための金融教育の充実が今日の教育課題になっていると述べられました。

講演に続き、「金融教育プログラムの趣旨と授業実践への提言」をテーマにパネルディスカッションが行われました。パネリストは、国立教育政策研究所の



工藤文三初等中等教育研究部長、前述の大杉昭英教授、岐阜大学教育学部の北俊夫教授の

お三方です（コーディネーターは恵谷英雄事務局長）。討議は多岐に亘りましたが、その中で、今後学校の授業の中で期待されることとして、ロールプレイ等を採用入れた参加型の実践や、献立作りの中でコストに言及するなど、幅広い教科において「金融教育の味付け」を加えた授業が提言されました。

分科会

学校段階ごとに行われた午後の分科会では、金融教育の実践例（各分科会で二例ずつ）について、報告およびワークショップが行われました。

小学校分科会では、多摩市立東愛宕小学校・新貝朗副校長より「くらしを支える水について調べてみよう〜水の旅マップづくり〜」、中央区立泰明小学校・向山行雄校長より「お店を開こう!!〜商品制作・販売活動など体験活動を通して、

経済のしくみを理解させる〜」についての報告がありました。またワークショップでは、学習分野ごとの「効果的な金融教育の視点」や、店の運営を教えることの難しさ等について話し合いました。

中学校分科会では、足立区立第四中学校・山田勝之教諭より「仕事と社会とのかかわりを探ってみよう!〜事前学習の工夫による、より有意義な職場体験〜」、大田区立羽田中学校・深澤千聡教諭より「生活に必要な金融商品を知って、選択する眼を持つ〜家庭生活と消費に心をもち、豊かな生活を〜」についての報告がありました。ワークショップでは、職場体験の実施時期・日数や受入れ先の開拓方法等に関する情報交換、および金融に関するクイズ問題を作って互いに

出題する演習を行いました。



高等学校分科会では、東京都立西高等学校・新井明教諭より「ロールプレイとシミュレーションを通して金融政策を学ぼう〜自由化と国際化、情報化の中の金融〜」、秋田大学教育文化学部・小高さほみ准教授より「おサイフケータイとコンビニからこれからの経済・消費生活を探ってみよう〜情報社

会の身近な金融と消費者の自立〜」についての報告がありました。またワークショップでは、経済指標に基づく金融政策決定等のロールプレイや、電子マネー等に関する授業実践の計画を立てる演習を行いました。

セミナーに参加された先生方からは、「職場体験に関する他県の実施内容が判り、とても参考になった」、「生徒に興味を持たせつつ実践するためにロールプレイなどの工夫が必要であり、ワークショップの経験が役立ちそう」などの感想が聞かれました。

今回のセミナーが二助となって、学校における金融教育の実践がさらに広がることが期待されます。